

安定した秋まき小麦栽培に向けて

は種作業は、その後の生育に大きく影響する重要な作業です。

近年、は種後の気温が高く、令和4年度秋春の平均積算気温は平年より35.0℃高くなっています(表1)。は種後の生育も平年より進みや速くなっており、は種適期や適性は種量も変わりつつあります。

今回は、「は種日」と「は種量」に注目し、当センターで実施している実証試験を交えて説明します。

表1 令和4年度の積算気温

	令和4年	平年
令和4年9月～11月	832	690
令和4年4月～7月	1586	1378

※参考：気象庁 HP 過去の気象データ

1 は種日

秋まき小麦の越冬には、葉の数が5枚であることが望ましいとされ、47.0℃の積算温度が必要です。逆算すると、十勝沿岸部のは種適期は

9月22日頃になります。これより極端な早まきは、過繁茂による雪腐病や収穫前の倒伏発生を助長する恐れがあり、一方、極端な遅まきは、凍上害による生育不良の原因となります。

2 は種量

は種量は、その後の茎数および穂数をコントロールするため重要で、は種時期を考慮して設定します。

越冬前の茎数が1000本/m²を越えてしまうと倒伏リスクが高まります。越冬前の目標茎数を900本以下とする場合、適期は種では、6kg/10aがは種量の適正とされています。過剰なは種量で設定すると、面積あたりの穂数が増加し、収穫前の倒伏を助長します。また、登熟期間に天候不良が続いた場合、穂数が多いと穂1本あたりの養分が減少し、細麦になりやすく、収量低下につながります。また、事前にキャリブレーションを行うことも重要です。作業開始時に途中で機械を止め、種子の落ち具合を確認し、調整しましょう。

3 次年度のは種に向けて

試験ほ場において、9月22日(適期は種)および9月29日(遅まき)の2日で、それぞれは種量を変えて調査、比較しています。

表2 根雪前の生育調査結果 (11/15 調査)

播種日	は種量 (kg/10a)	草丈 (cm)	葉数 (枚)	茎数 (本/m ²)
9月22日	6kg	17.0	5.5	1360
9月29日		14.1	5.5	840

表3 各区の茎数および穂数

播種日	は種量 (kg/10a)	4/15茎数 (本/m ²)	収穫期穂数 (本/m ²)
9月22日	4kg	1392	680
	6kg	1752	760
	11kg	2048	864
9月29日	6kg	1208	512
	11kg	1416	592
	15kg	1600	784

は種日に関しては、表2を見ると、9月29日6kg/10aのは種でも問題なく生育できており、秋の気温が高い昨今では、遅まきを理由には種量を増やす必要はないかも知れません。(遅まきを推奨するものではありません。)

また、表3より令和4年度は、は種量が多いほど茎数や穂数が増えやすい傾向であったことが読み取れます。また、は種量が多いと倒伏が発生しやすく、倒伏部分の細麦や腐敗によって製品収量が減少する結果となりました(写真、図1)。

温暖化が進み、麦の成長も旺盛になりつつあります。適正なは種を心がけ、倒伏させない安定した麦作りを目指しましょう。



写真1 倒伏の様子 (2022.7.1撮影)

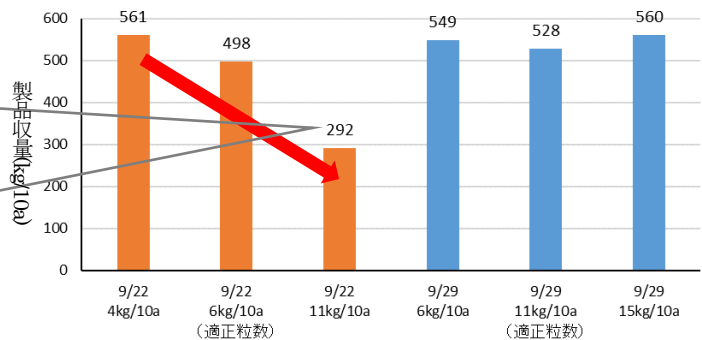


図1 各区の製品収量